

特集
つながりの原点

家族

を問う

家族とつながりの文化史

船曳 建夫 *Interview with Takeo Funabiki*



東京大学大学院総合文化研究科教授

人間の家族を捉える3つの観点

約1万年前、それまで続いてきた狩猟採集の文化から、人類は農耕牧畜による農業文明の段階へと入った。今、我々がイメージしている「家族」というのは、この農業文明の中から生まれたものである。その後さらに何千年かが過ぎ、1500〜2000年前から始まった産業文明により、我々の生活の仕方やそれに伴う家族についての価値観も、すべてが劇的に変化してきた。しかし我々は、農業文明から続くこの家族という制度を急変させるやり方ではなく、時間をかけて少しずつ変えていき、いわば使い回しをしながら、ここまで維持してきたのだと言えるだろう。

この農業文明から続いてきた人間の家族というものを改めて考えてみると、次の3つの観点から捉えることが可能である。

第一に、家族は食糧を獲得するための生産の単位であったということ。農業に限らず、商人であっても職人であっても、家族は、ひとつの技術と資本を自分たちのものとして、次の世代に伝えていきながら存在してきた。たとえば政治というものも、ひとつの職業だとすれば、首長であれ王であれ、支配階級でさえも家の仕事として、ある価値を生産していたのである。

第二に、家族は再生産の単位であるということである。そこには2つの再生産がある。1つは次世代を再生産するということ。子どもを産み育てて次の世代をつくっていく。農耕文明の場合は、そうやって育てた子どもが、その家もついている資本、つまり耕作地や道具などと同時に技術・知恵を受け継ぎ、生産の単位としても続いていくものであった。そして、もう1つの再生産は、自分自身の再生産である。昼間の労働で疲れても、家に帰って食事をして眠り、翌朝になると再び昨日と同じ自分になる。自分自身の活力を毎日再生産する場、それが家族である。

つまり、家族は生産の単位であり2つの再生産の単位でもあった。

現在でも、多くの人たちはまだ家族というものをそうしたイメージで捉えているのかもしれない。しかし、現実にはすでにそこから大きく変化してきている。今では、子が親の職業を継ぐことは少数派である。多くの場合、男親が外で働いてお金を持つてくるが、家が生産の単位である場合ももう多くはない。かつて身分と職業が結びついていた時代には、家族は生産の単位としての拘束力をもち続けたが、現在ではその身分制もすでに形を失っている。農業文明から産業文明に移ったときに、家族は生産の単位である必然性をもたなくなったのである。

こうして、子は親から技術と資本とを受け継ぐ必要がなくなってきた。そのかわりに、子は技術や知識を公教育の中で受け取るようになった。

つまり生産の単位としては、すでに親と子との間が切れてしまっている。もちろん農家や商家や職人の家は今もあるが、その人たちですら家族としての生産の単位であることをやめることは可能であるし、今後ますますその傾向が強まっていくように思われる。

一方、再生産の場である家族の重要性は、いまだに強く残っている。次世代を生み出すことについては、家族以外のユニットをこれまで人類は発明したことはない。イスラエルのキブツなど実験的な試みはいくつかあるが、人類の場合は子どもを家族という単位以外で育てて成功したという例はない。

また、自分自身を再生産する場としての家族の意味は重要で、それは多くの人が実感するところでもあるだろう。各人が家に戻ってきたときにするのは、やはり夕食を食べて風呂に入り、互いに会話をしながら癒し合って、ゆっくりと寝て、次の日を迎え、再び元気になって出ていくということ。これらの活力の再生産は現在の家族の最も重要な機能と言っている。その一番の特徴は、自分た



ちの身体をいわば互いに許し合って重ね合うような場として、家族というものがあるということだ。ここでは、父親がパンツ一丁の姿で娘の前を歩き回っていても不思議でないし、家族全員で一緒に入浴していたとしても誰もとがめることはない。

人の身体の使い方は、家族の内と外とは大きく違う。家の中でする身体の行為の多くは、外ではあまりしないことである。たとえば、家の中では、大きく口を開けて食べたり、笑ったり、横になってテレビを見たり、無防備で眠ったり、セックスをしたりする。特に、身体の内側から湧いてくる感覚、センサーションに伴った行為というのは、外ではそのままではしないことである。もちろん人間だから、人前でもお腹がすけば食べ物を食べるが、目の前のものを勝手にがつつ食べた

り、ところかまわず排泄したり、人目をはばからずセックスをしたりはしない。他の動物がするようなことを人がしないのは、自分たちの行動というものを社会的にコントロールしているから、欲求に基づく行動を、もう一度文化的に仕立て直しているからである。

社会的関係においては、人間は自分たちがつくり上げた社会的な価値観や文化的な価値観を同時に表現しながら振る舞っている。それらはDNAには組み込まれていないもので、生まれた後に身につけたものである。特に、会話をするのは我々が文化的につくり上げた行為の典型で、やり方がきちんと決まっています、ある意味で100%近くコントロールができる。たとえば敬語についても、間違えることなくうまく使えれば、互いに不愉快な思いをしなくすむ。ところが、のどが渇くとか、ごはんが食べたいとか、トイレに行きたいとか、眠くなるとか、異性とセックスがしたいとかの、こういう内側からのセンサーション、ある強い感情がわき起こつ

てきて行動することに関しては、我々はなかなか完全にはコントロールしきれない。

つまり、内側から湧いてくる衝動による行為というのは、外では非社会的なふるまいになりがちで、社会的な場面では我々はなるべくそれを抑制しようとしている。だから逆に、人はそれを自然に発露できる自由なりラックスした環境を求め、それを可能にするのが家族という場である。そこでは、裸になつて入浴することもできるし、口を開けて何時間も眠ることもできる。非常に無防備で、外でするとやや恥ずかしい行為でもあるし、人間の社会的秩序に反する危険な行為である場合もある。そうしたことを互いに許し合つて行うことができるということが、活力の再生産の場としての家族のひとつの側面なのである。

産業文明に入つても、我々はそうした場所を必要としてきた。一夫一妻制でも一夫多妻制であつても、そもそも始まりが、互いの身体を許しあうことで始まる。そのふたりは、社会的なふるまいをするだけのふたりではない。さらに、ここに生まれてきた子どもは、母親のお腹の中から出てきたものである。出てきた直後は、自分では食べることもうまく排泄することもできない、いわば全く非社会的な存在。そのプロセスをすべての人間が経てきている。人はそういう存在であるからこそ、家族の中で互いに許されることを求めるのである。

家族の外でも生きていける現代

家族は互いを許し合うことによつて、自分自身の活力を再生産する場として今も重要な意味をもっている。しかし、家族というのは必ずしも良



いものとしてだけ存在してきたわけではない。逆に家族であることが負担となる関係になつてしまう例も少なくはない。かつては、父親が非常に権威をもち、妻は夫に服従し、子どもは使用人のように扱われ、女の子は父親の考えによつて結婚相手を決められるというような家族もあつた。そして、程度の差はあれ、今でも同じような家族は存在することだろう。昔は、そこに不満はあつても、家族が生産の単位であることの規制は非常に強く、そこからはみ出てしまつたら生きていくことができなかつた。しかし、今ではそこから飛び出ていくことは、そんなに困難なことではない。

昔の家制度のようなものへの反発だけではなく、今はいろいろな理由から、家族は自分にとつて好ましい場とは思えない、だから外に出てひとり生きていくという人も数多くいる。食事を作つたり洗濯をしたりは自分でできるし、今は衣食住のほとんどのことがアウトソーシングできる。恋人がいても結婚しないという暮らしも可能である。あるいは、たとえ家族というものの中にいても、それぞれが自分の部屋をホテルのようにして暮らすこともできる。その意味で、外見以上にな多様な家族の形が現実には存在している。

つまり、近年においては、我々は家族とではなく、ただひとりで暮らすという暮らし方ができ、そしてそこで自分自身を再生産し、自分の人生を充実させることが可能になつてきている。ただし、本当にそれが持続可能なシステムかどうかは、まだ十分には確かめられていないのが現状である。

元氣な30代40代の男性や女性でも、ひとりでの暮らしを続けているときに、人間が生物的にもつている愛着の感情のようなものが、日々の暮らしの中で十分に表現されないとしたら、その影響はどのようなものになるのだろうか。そうしたこと

の積み重ねによって我々に与えられる喪失感やストレスは、どのような形で暮らしぶりに現れてくるのかは、今のところ予想がつかない。さらに、たとえ自分自身の再生産がひとりのできるとしても、そのような個人としての人間たちの関係性はどうなっていくのだろうか。そうした意味でも、新たな社会やネットワークのかたちが、今は試されているところでもあるようだ。

家族をめぐる価値観とその変容

我々は自分が育ったようにしか子どもを育てられない。なぜなら、それ以外のイメージをつかむことがなかなかできないからだ。家族は大きく変化しているという捉え方もあるが、逆の見方をすると、むしろ家族は非常に強固なものでもあると言える。

我々は一度しか生まれ育たない。その間にさまざまな価値観を自分の中に内在化させていく。良い家族であればあるほど、親子愛であるとか、自分が見てきた両親の夫婦愛の姿を全く無意識に受け入れていくことになるだろう。

家族に関わる価値観というのは、何千年もかけてつくられてきたものである。親子愛や夫婦愛、子どもの間のきょうだい愛などもそうしてできあがってきたものだ。それは我々のDNAの中にあるものではなくて、生まれながらにもっている愛着や依存の感情などを、あるときは文化的にさらに強く、いつそう複雑なものへとつくり上げ、世代を越えて伝えてきたものである。それを表現する演劇があり、詩とか和歌とか小説があり、絵画がある。芸術作品ではなくても、それを表現する日常の言葉があり、そうしたもののすべてを通じて家族愛という価値観がつくり上げられてきたのである。



こうした親子愛や夫婦愛、きょうだい愛などの価値観は、何千年もかけてつくられてきた我々の社会の財産だと言える。だから、それを振り捨て、ある新しい価値観をゼロからつくっていくというのは無意味であるし不可能に近い。我々にできることは、すでに自分が受け取った価値観をうまく使い回していくことにしかない。

しかし一方で、現実の社会は大きく変わっている。初めは徐々に変わりながら、やがて以前の価値観が大転換するようなことも実は十分にあり得る。

その一例が「忠義」という価値観である。浄瑠璃の「義経千本桜」に「恋と忠義はいずれが重い」という文句がある。忠義は恋と匹敵するような強い感情であった。その忠義というのは、何千年もかけてつくられてきた価値観だが、それが現代の社会

ではその存在の意味を失ってきている。もちろん、会社に対する忠誠心とか、上司や上官への心酔、あるいはチームの監督への信頼とか、今の社会にも形を変えて部分的には残されている。しかし、かつての身分制の中の忠義は、この200年ほどで驚くほどの勢いで薄れてきてしまった。現代に生きる我々は、身分制社会は個人の自由を縛るものだと感じており、それに付随していた忠義という価値観に対しては、全く重きをおかなくなってしまったのである。

家族の親子愛でも、親がある意味で子を縛り、子が親に縛られる関係であるという側面をもつ。社会状況が変わり、そうした束縛への批判が高まるようなことがあれば、親子愛が薄れていくことと忠義心が薄れたこととは、おそらくパラレルな現象になるだろう。親子愛、夫婦愛、きょうだい愛は、確かに悪いものではない。だから、それが消えることはないと思っている人が多いが、その元となっている関係性が、たとえばその生産の機能が失われたように崩れていけば、その崩れ方は、ある時には急速に加速するかもしれない。

家族というものがこれまで強固に残されてきたのは、その価値観を我々が生まれ育つ過程で身体の中に取り取ってきたからである。一方、自分の身体との距離があるものは取り替えが可能である。だからコンピュータでも携帯電話でも、道具や機械は最新のものにいくらでも替えられる。しかし家族というものは我々の身体に近いところにあつて、成長とともに自分のものにしてきた、自分の身体と関わっているシステムである。だから、なかなか総取り替えはできない。しかし少しずつ変わつていつか、長い目で見た結果として、大きく変容しているということは起こりうる。その変転は予測できない。

家族の変化はゆらぎの中にある

現在の家族では、子育てをしたあとの人生の方が長い。しかも子どもたちはあてにできない。そうなると、晩年をどう暮らすのかということへの関心が高まつてくる。

上野千鶴子さんは、「おひとりさまの老後」を考へるべきだと言う^(※1)。夫婦だつて結局は、どちらかが先に死んだらひとりだと。結婚することや子どもを産むことは老後の保証にはならない。だから、ひとりですぐ生きるかを早くから準備しておくべきだと言う。でも、それは言い方が逆転しているようにも思える。夫婦である間は、片方が死ぬまでは、長い間ふたりでいることができるのだ。

子は思ったほど助けにならないというメッセージの方は、夫婦のどちらかが死ぬよりは早く現実化する。でもそれは、家族像の変化のゆれ幅の中のこと、すべての場合に親子が離れてしまうものでもない。かつてはみんな大家族で親も子も孫



も一緒に住んでいたが、今は子どもが巣立つたら、親のことなど一切顧みないというのは、少し振れている現実をさらに極端に解釈しているように思える。

イギリス人の家族の場合、早い段階で子が独立する。その個人主義の起源について、アラン・マクファーレンはこう言う^(※2)。イギリスでは、産業革命の随分前から、子どもは成長すると別の家に行つて働いていた。そして、その家には別のところの子が来て働く。こうして、子どもは必ず家を出る。こうした価値観は、今のイギリス社会にも受け継がれている。イギリスの学生は大学に来ると親から離れる。親から離れて自由になりたいのだ。家がどんなに金持ちでも、国が授業料を払ってくれるし、アルバイトをして稼ぎ、わずかな額も節約して生活する。親の方も、子が巣立つていく際には、自分の仕事をひとつ終えたという気持ちになるといふ。ところが、子どもたちが40歳くらいになって、親が引退する頃になると、今度は子どもたちが親のことを心配するようになる。一緒に住むということではなくても、きょうだいたちがいつも連絡を取り合つて、親がどうやって暮らしているかを見守っている。親の誕生日やクリスマスには全員顔を揃える。そういう家族のネットワークの中で愛情を示し合うという価値観が確立されている。

日本では、家庭内での親子愛が強い一方で、離れた関係での親子間の価値観が確かなものとしてはない。今は、現実がゆれながら変化している。田舎でひとり暮らしをしていたり、老人ホームに入つたりして、子どもたちの世話にはならない、迷惑はかけたくない、と言う親に対して、むしろ子どもの方がとまどつているように見える。老人ホームは独房ではないし、いくらでも訪ねていける。困惑の理由は、親が自分の親にそうしているところを子どもが見てきていないからかもしれない。今は、

それぞれの人が、いろいろな関係性を模索して生きているというのが現状であるのだろうか。

つながりの意味と人類史的な過渡期

先に述べたように、人の内側から湧いてくる生物学的なセンサーは、完全に文化化、社会化できない。そうした、ある意味で危険で恥ずかしいことを分かち合うことができる人間関係、その中に快さを得るところに家族のつながりの意味がある。それは我々の元からある生物的なものと関わってくる。身体的な接触や会話もそうで、人間的な接触が気持ちをおん心地させる。森の中で、単独で暮らせる動物もいるが、おそらく我々はそうではない。

人間にとって、他人とのつながりが決定的に重要だというのは、人間が受け手がいなければ成立しない言葉をもっているということだけでも理解できる。我々は始終、人間的な言葉のやりとりをしているが、それもむしろ身体的なものである。「いい天気だね」「いい天気ですね」。こうしたやりとりは、サルがノミを取り合うのと同じ。笑顔の挨拶や会話を通じた交流は小さな再生産でもある。人間が条件として持っている弱さのようなものを互いに無条件で認めあえる相手と暮らすことの安心感は大きい。最後は、誰だつて動けなくなつて死ぬ。人間はそういう完全な弱みを内在的にもっている。

今後、そうした関係性を担っていくのは、引き続き夫婦や親子で住む家なのか、友人同士の暮らしなのか、あるいは高齢者たちや多世代居住の集合住宅なのか。その形は分からない。近隣の人との良好な関係とともに、遠く離れた親子の関係も必要であるだろう。そして、それ以外のつながりの形も。そのつながりは、農業文明の中では家族に集約されていたものであるが、現代社会ではさまざまなかたちで現れてくることになる。

我々は、家族というまとまったシステムで何千年もやってきたが、それが生産単位でなくなり、人が自由に動き始めて、外見的には家族は早くからばらばらになつて見えるように見える。それでも、家族は我々にとつて、ほとんど生きる糧としての存在である。これからは、家族の中で集約していたものを、いろいろなつながりで分散してもつのか、それとも、他に核となるような、つながりの場というものが生まれてくるのか、それは分からない。しかし、家族というものが変わるのだというサインはもう示されている。我々は、すでに人類史的な変化における長い長い過渡期にある。しかしながら、自分の中に大切なものとして価値付けされている家族というものを進んで捨てる必要はない。我々はこれまで積み上げてきた家族に関わる価値や意味を、選択しながら、それを抱えて未来に向かつて進んでいくしかない。

本稿は、船曳建夫氏へのインタビューに基づいて編集室にて構成したものです。

CEL

参考文献

- (※1) 上野千鶴子「おひとりさまの老後」法研(2007年)
- (※2) アラン・マクファールン「イギリスと日本—マルサスの農から近代への跳躍」船曳建夫監訳、新曜社(2001年)

船曳 建夫 (ふなびき たけお)

東京大学大学院総合文化研究科教授。1948年東京生まれ。東京大学教養学部教養学科卒業、ケンブリッジ大学大学院社会人類学博士課程修了(Ph.D)。専門は文化人類学。フィールドワークをメラネシア(バヌアツ、バブアニューギニア)、ポリネシア(ハワイ、タヒチ)、日本(山形県)、東アジア(中国、韓国)で行なう。関心は、身体における自然性と文化性、儀礼と演劇の表現と仕組み、近代化というプロセス。著書は、『日本人論「再考」(講談社学術文庫)、『右であれ左であれ、わが祖国日本』(PHP新書)ほか多数。